

草原がつなぐ人・自然・文化

全国草原再生ネットワーク

ニュースレター vol.50 (Apr. 2022)



市民によるニゴ作り (ニゴと草カッパの会 田澤佳子氏提供)

「未来に残したい草原の里 100 選」が決まりました

「未来に残したい草原の里 100 選」は、2021 年 9 月 27 日～2022 年 1 月 17 日の期間に募集が行われ、「草原の里」34 地区に存する 37 草原からの応募がありました。

運営委員による一次審査を経た後、2022 年 3 月 14 日に、東京都内にある全国町村会館にて、第 2 回選考委員会が開催されました。7 名の選考委員全員が出席され、応募があった草原の里に関する資料をもとに、選定の可否などについて議論が行われました。各選考委員からは、応募のあった草原の魅力などが語られるとともに、草原の価値を再認識する心強いアドバイスもありました。

選考委員会の結論として、応募のあった 34 地区全てを「未来に残したい草原の里 100 選」として選定することに決まりました。



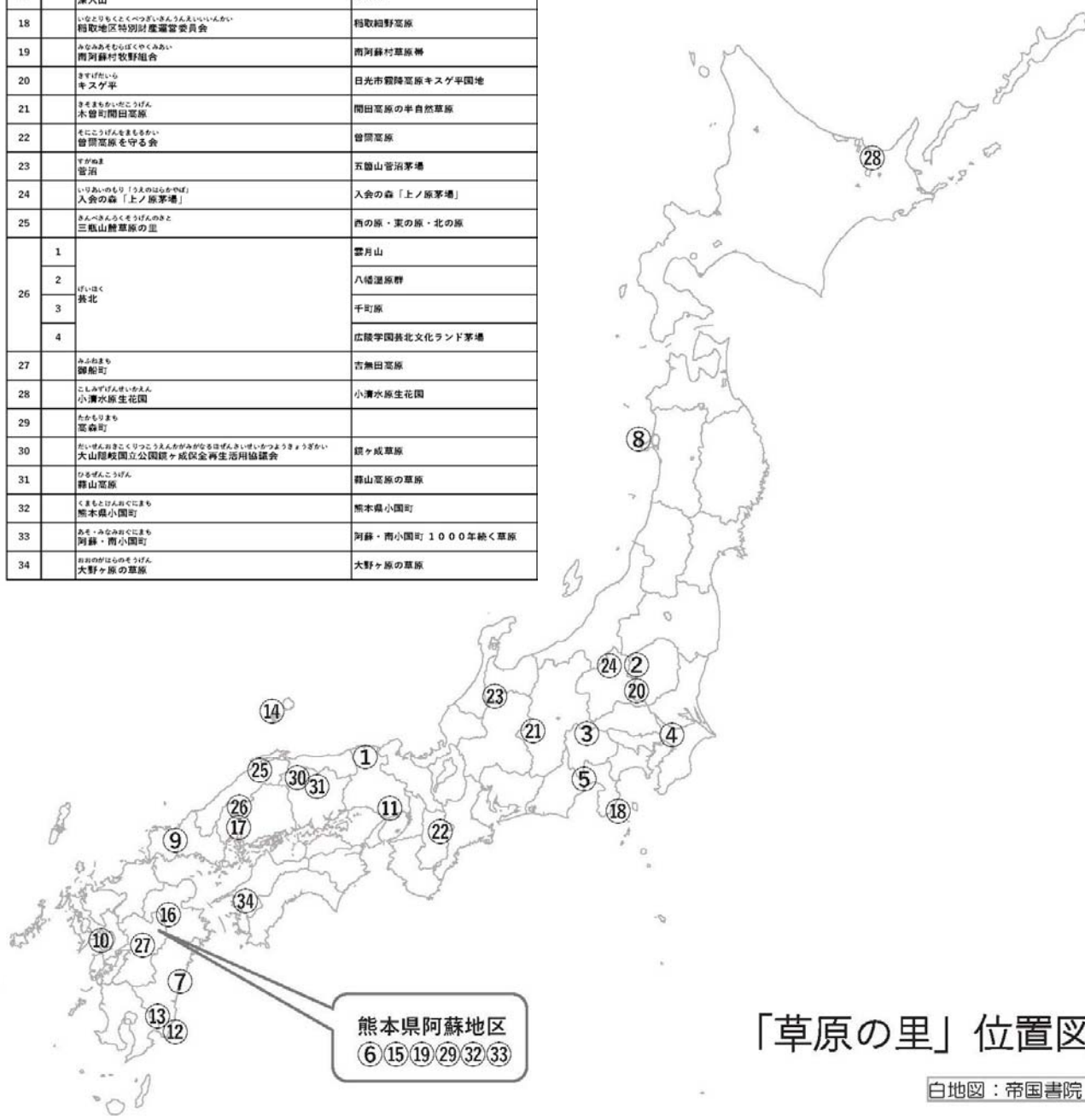
未来に残したい草原の里 100 選 選考委員会名簿 (50 音順)

氏名	所属・職
安藤邦廣	里山建築研究所主宰
太田長八	全国草原の里市町村連絡協議会会長、静岡県東伊豆町長
高橋佳孝	(一社) 全国草原再生ネットワーク代表理事
長沢 裕	タレント、(公財) 日本環境教育フォーラム理事
町田怜子	東京農業大学准教授
湯本貴和 (委員長)	京都大学霊長類研究所教授／所長
養老孟司	東京大学名誉教授

今後は、応募者への通知、プレスリリース、ホームページでの公表などを行うとともに、2022 年の秋頃には、表彰式やシンポジウムを開催する予定です。

また、表彰式に向けて、草原の里 100 選を紹介する冊子も作成する予定です。

番号	枝番	草原の里名称	草原の名称
1		うまやまこうげん 上山草原	上山草原
2		どろおのとうげんをむじだいに一日光茅ポッチの会 土呂部の茅場	土呂部の茅場
3		おとめこうげんふんてんらぶ 乙女草原ファンクラブ	乙女草原
4		やまむぎのほらっぱとりのかい 谷田武西の原っぱと森の会	武西の草原
5		ふじのみやしほびくあざりそうげん 富士宮市根原区新鶴草原	新鶴草原
6		うぶやまむら 嵐山村	嵐山村
7		かわのみちりょう 川西町	川西草原植物群落
8		かんこうざん 寒風山	寒風山
9		あきよしたい 秋吉台	秋吉台
10		おくらげんしほをそらげん 奥雲仙田代原草原	奥雲仙田代原草原・遊々の森
11		ひがしおふくやまそうげんほびくかい 東お多福山草原保全・再生研究会	東お多福山草原
12		とよみきき 藤井峠	藤井峠
13		かきざーふさけそうげん 笠紙・古竹草原	笠紙・古竹草原
14		にしのみちりょう 西ノ島町	西ノ島町
15		あそし 阿蘇市	阿蘇市の草原
16		くじゅうはんたこうげん くじゅう飯田草原	飯田草原（泉水山、夕子原草原、大荷原、一目山、豊後渡等）
17		しんにゅうざん 深入山	深入山
18		いなりもちとくつこうげんさんまといんかい 稲取地区特別財産審議会	稲取細野草原
19		みなあそむもほくやくみかい 南阿蘇村牧野組合	南阿蘇村草原
20		きすげたいら キスゲ平	日光市霧降草原キスゲ平国地
21		きそまもいたたこうげん 水曾町間田草原	間田草原の半自然草原
22		そにこうげんをまもるかい 曾根草原を守る会	曾根草原
23		すがのみ 菅沼	五箇山菅沼茅場
24		いひのもり「うまのはなやげん」 入会の森「上ノ原茅場」	入会の森「上ノ原茅場」
25		さんてんふくそうげんの里と 三瓶山麓草原の里	西の原・東の原・北の原
26	1	ばいほく 共北	雲月山
	2		八幡蓮原群
	3		千町原
	4		広陵学園共北文化ランド茅場
27		あふねまち 御船町	吉無田草原
28		こしみづげんせいせえん 小湊水原生花園	小湊水原生花園
29		たかもりまち 雲森町	
30		だいげんおきこくつこうげんかみかみなるほげんあいはつこうぎょうかい 大山郡萩園立公園親ヶ成保全再生活用協議会	親ヶ成草原
31		ひるがなこうげん 霧山高原	霧山高原の草原
32		くまもとひんあてにまち 熊本県小園町	熊本県小園町
33		あそ・ゆのみ町にまち 阿蘇・南小園町	阿蘇・南小園町 1000年続く草原
34		おおのけはらそうげん 大野ヶ原の草原	大野ヶ原の草原



「草原の里」位置図

白地図：帝国書院

各地からの報告

オンラインシンポジウム「木曽馬文化を持続可能な未来に活かす」開催報告

(浦山佳恵：ニゴと草カッパの会・長野県環境保全研究所)

長野県木曽町開田高原は、日本在来馬のひとつである木曽馬の産地として300年以上の歴史をもっています。20世紀中葉にも700頭近い木曽馬が飼われており、馬のための採草地や放牧地として約5,000haの半自然草地在り広がっていました。しかしその後、馬の飼養が衰退し、今も残る半自然草地は約5ha、約40頭の木曽馬はその大部分が「木曽馬の里」などで保存・活用事業によって飼われています(図1)。今も残る半自然草地の一部では、隔年での春の火入れと秋の草刈りによる伝統的な管理が続けられており、草原性の種の多様性が高いことがわかっています(図2)。またこうした草地管理の技術のほか、刈草を「ニゴ」(図3)と呼ばれる干し草積みにして冬の飼葉にする技術、葉草をはじめとしたさまざまな植物利用の知識など、木曽馬や草に

かかわる豊かな伝統的知識や文化が伝えられています。

2018年、伝統的な草地管理と木曽馬にかかわる文化を再生し、特色のある地域づくりにつなげる活動が地域で始まりました。具体的には、一度放棄された場所で伝統的な火入れと草刈りを復活させ、刈った草を馬に与える活動をしてきました。2020年以降は認定NPO法人アースウォッチ・ジャパンの野外調査プログラムの一環として、再生した草地で植物がどう復活してくるかという市民調査を企画しましたが、2年間感染症の流行で中止を余儀なくされてきました。しかし、この間オンライン連続講座を通して、関係者間での相互理解も深まってきましたので、その一端をお伝えしたいとこのイベント(図4)が企画されました。



図1 木曽馬の保存施設「木曽馬の里」



図3 市民が木曽馬経験者にニゴ作りを教わる



図2 キキョウが咲く開田高原の草

1. テーマ	木曽馬文化を持続可能な未来に活かす																																										
2. 日時	2022年3月6日(日)13~15時																																										
3. 方法	Zoomを利用してオンラインで開催																																										
4. 内容	<table border="0"> <tr> <td></td> <td>総合司会</td> <td>木曽町地域おこし協力隊</td> <td>服部泰英</td> </tr> <tr> <td>13:00</td> <td>はじめに</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>13:05</td> <td>趣旨説明</td> <td>長野県環境保全研究所</td> <td>須賀 丈</td> </tr> <tr> <td>13:15</td> <td>話題提供</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>「日本在来馬木曽馬の保全生物学」</td> <td>岐阜大学</td> <td>高須正規</td> </tr> <tr> <td></td> <td>「開田高原の素晴らしい生物多様性とその成立要因」</td> <td>東京大学</td> <td>内田 圭</td> </tr> <tr> <td></td> <td>「木曽馬の過去・現在・未来」</td> <td>木曽馬保存会</td> <td>中川 剛</td> </tr> <tr> <td></td> <td>「草を刈って馬を飼う、干し草をつくれれば花が咲く?！」</td> <td>ニゴと草カッパの会</td> <td>田澤佳子</td> </tr> <tr> <td>14:20</td> <td>パネルディスカッション</td> <td></td> <td>須賀 丈</td> </tr> <tr> <td>14:55</td> <td>おわりに</td> <td></td> <td></td> </tr> </table>				総合司会	木曽町地域おこし協力隊	服部泰英	13:00	はじめに			13:05	趣旨説明	長野県環境保全研究所	須賀 丈	13:15	話題提供				「日本在来馬木曽馬の保全生物学」	岐阜大学	高須正規		「開田高原の素晴らしい生物多様性とその成立要因」	東京大学	内田 圭		「木曽馬の過去・現在・未来」	木曽馬保存会	中川 剛		「草を刈って馬を飼う、干し草をつくれれば花が咲く?！」	ニゴと草カッパの会	田澤佳子	14:20	パネルディスカッション		須賀 丈	14:55	おわりに		
	総合司会	木曽町地域おこし協力隊	服部泰英																																								
13:00	はじめに																																										
13:05	趣旨説明	長野県環境保全研究所	須賀 丈																																								
13:15	話題提供																																										
	「日本在来馬木曽馬の保全生物学」	岐阜大学	高須正規																																								
	「開田高原の素晴らしい生物多様性とその成立要因」	東京大学	内田 圭																																								
	「木曽馬の過去・現在・未来」	木曽馬保存会	中川 剛																																								
	「草を刈って馬を飼う、干し草をつくれれば花が咲く?！」	ニゴと草カッパの会	田澤佳子																																								
14:20	パネルディスカッション		須賀 丈																																								
14:55	おわりに																																										
5. 主催	木曽馬文化と草原の再生チーム																																										
6. 後援	木曽町, 木曽町教育委員会, 木曽町環境協議会, アースウォッチジャパン																																										

図4 シンポジウムの内容

高須先生は、木曾馬はかつて全国で 32 頭まで減少したが現在 150 頭まで回復していること、木曾馬には地域の文化を象徴する想いとしての価値があり、地域資源として木曾馬の新しい価値を生み出せないかと考えていること、内田先生は開田高原の伝統的草地に生息する希少な植物や昆虫のこと、伝統的管理が失われた草地では有用植物の種数も減少していること、中川さんはこの 25 年間木曾馬の保存のために、乗馬、ホースセラピー、馬耕や荷役、祭り馬、国道沿いでの放牧等木曾馬の活用を模索してきたこと、馬飼育の学びの場として木曾は最先端であること、田澤さんは 2018 年に「ニゴと草カップの会」を立ち上げ、かつて「草カップ」と言われた干草山で「ニゴ」を作り干草を馬の飼葉とする活動をしていること、会には新規馬飼育者・馬飼育経験者・研

究者・自然愛好家等多様な立場の人が関わっていること、馬飼育経験者から干草作りを学び、マニュアルを作ったこと等が話されました。パネルディスカッション（図 5）では、馬飼育技術や干草作りなどの伝統知を共有する仕組み作りが重要である、「馬の学校」のようなものができれば馬文化継承のプラットフォーム的な活動ができるのではないかなど意見が出されました。

当初は木曾福島でシンポジウムを開催する予定でしたが、コロナ禍で急遽オンラインに切り替え残念に思っていたところ、全国から 120 名の大勢の皆様にご参加いただくことができました。ご参加いただきました皆様には心から感謝申し上げます。有難うございました。



図 5 パネルディスカッションの様子

上段左から須賀さん、高須先生、中川さん、下段左から内田先生、田澤さん、服部さん

シンポジウムの参加報告

（岩田光太：神奈川県在住）

3 月に開催されたシンポジウム「木曾馬文化を持続可能な未来に活かす」について報告します。

ファシリテーターの須賀丈氏（長野県環境保全研究所）により、在来馬と半自然草原の関わりについてのご講話がなされてシンポジウムが始まりました。

例えば、日本ウマ科学会の学術集会（第 25 回：2012 年）における「日本在来馬の現在と活用の道」を拝聴して得た共感や疑問点を考察してたどり着いたのが「草地と日本人」（須賀丈・岡本透・丑丸敦史著、築地書館、2012 年）という書籍で、そこで始めて「半自然草原」という言葉を知りました。

その後、草原サミット（2014 年、阿蘇）に参加するなどして草原再生の取り組みを学んでいくにつれ、

草原再生側では「植物・昆虫・小動物」が中心で、「家畜保全」にスポットライトがあてられていないと感じ、草原再生と和種馬保全の橋渡しに興味を持つようになりました。そのような筆者としては、須賀先生によるこのようなシンポジウムに強い期待を感じて参加を心待ちにしていました。

高須正規氏（岐阜大学・獣医学）は、木曾馬の生物学として、「保存」と「保全」の違いについて触れながら、特に「保全」は「想いに対する価値」を損なわないようにする必要のあることのご講話でした。

内田圭氏（東京大学・生態学）は、開田高原の生物多様性について、それがエコシステムサービスに貢献していることは確かなので、その機能を十分に

高めるように里山・森林の管理方法を導入する必要があるとのご講話でした。

中川剛氏（木曽馬保存会）は、木曽馬について、過去の軍馬政策の影響で今日の木曽馬の純血維持が難しくなりつつある点、および木曽馬の利活用の状況についてのご講話でした。

田澤佳子氏（ニゴと草カップの会）は、厩を中心とした木曽馬文化について、厩肥（まやごえ）に着目した生活様式の伝承についてのご講話でした。

これまで両団体のセミナーやシンポジウム等に参加してきた経験からは、全国的に草原再生団体と在来馬保全団体が密接に協力している地域は未だ少ない状況だと思います。そこで今回は、草原再生団体の皆様に馬関係者（馬事団体）の主な特徴・課題について述べていきたいと思えます。今後の連携の糸口や妥協点の摸索などのヒントになれば幸いです。

1. 馬を大切にしすぎる

日本は明治時代の西洋化により、西洋馬術が「輸入」され、その背景は「軍馬生産」でした。馬術はアカデミズムを基礎とした体系的な技術で、経験値の蓄積とは比較できないものでした。やがて、第二次世界大戦後に軍馬生産は衰退しましたが、馬産は「競走馬生産」に代わっていきました。軍馬も競走馬も「価値（利害）」そのものであるため、徹底管理をします。その影響が強く、日本の馬関係者は「馬を非常に大切にす」傾向にあります。アニマルウェルフェアという概念も定着しているように、動物は大切にされるべきですが、日本の馬関係者の「大切」のレベルは「世界最高水準」を全ての飼育に求めるがごとくとも言えます。本当に、広く整地された平坦な土地を造成しなければ馬を飼育できないのか？本当に、馬は他の家畜と比べて非常に扱いが難しい動物なのか？本当に、毎日ピカピカに磨き上げる必要があるのか？

2. 「血統」という考え方

サラブレッド競馬の影響で、「純血種」という考え方が非常に強いです。生物多様性という側面からは、ある時点の遺伝情報はその時の写像でしかないと思われませんが、「最良の遺伝情報」があるという前提で「血統」という仕組みが作り上げられています。しかし、血統管理手法にもオープン・ブックとクローズド・ブックがあり、前者は「他品種」からの種馬の導入が認められる制度です。この点、サラブレッ

ドは後者で、サラブレッド以外の血統からは名馬は生まれ得ないというような発想です。しかし、どちらにせよ、登録された馬（品種）は「人々の合意」に過ぎません。つまり、今日では遺伝情報という考え方で導入されて議論されていますが、品種という括りは非科学的な側面を含んでいるのです。

日本の在来馬は近代的な育種（洋種導入による品種改良）の影響を受けておらず、前近代の「選択的淘汰」による結果であるが故に、今となっては「希少種」という位置づけになっています。それであるにもかかわらず、馬事関係者は各地の在来馬を「純血種」と見立てて保全していこうとする発想が根本にあって払拭できずにいるため、各地に伝わる在来馬の総合的な保全活動の方向性を狭めてしまう傾向にある（※）のではないのでしょうか。これは、競技の世界では、「品種と品種改良」が経済価値を裏打ちするものであるからやむを得ないものと思えます。しかし、他の世界（観光業や草原再生など）では本当に必要な概念なのかどうかを、初期段階でしっかりと話し合う必要があると考えます。

※日本の馬（近藤誠司編、東京大学出版、2021年）の終章「在来馬の未来」は、在来馬を「8品種を遺伝的に1つの集団と認め」たうえでの保全活動が提言されており、今後の変化が期待される。

3. 利活用＝乗馬

西洋馬術は、西洋化以前の経験値を刷新する形で導入された経緯があるため、馬を扱うことを「馬術」や「乗馬」と同義としがちで、人と馬の関係は「乗ること」を前提とするべきと考えてしまう傾向にあります。そのため、在来馬保全や引退競走馬の利活用については、乗馬やホースセラピーといったアイデアがメインになってきます。しかし、そのような需要は「改良品種馬」に代替されて失われた需要であり、これを回復させようとするのはそもそも「不利な取り組み」である可能性がある点を議論しない傾向にあります。乗らずとも一緒に暮らしていく馬の飼育方法をメインに考えてみるべきではないのでしょうか？この点、都井岬の御崎馬は、乗ることが禁止されている馬ですので、その利活用の方法は非常に参考になると考えられます。

しかし、他の地域では「御崎馬」を手に入れることができないので参考にできないのでしょうか？視点を反転させると、御崎牧野においては、御崎馬以外の家畜を導入することができないという制約を持

っているとも言えます。つまり、他の地域（半自然草原）では「望む馬を導入できる」というチャンスがあり、「導入する馬をどのようにブランディングするか」というチャレンジがあると言えるのではないのでしょうか？

4. 馬事ビジネス

「馬産業」に成功しているビジネスモデルが存在するかどうかを考えることは重要です。馬事産業には大きく分けて「乗せる型」と「見せる型」のモデルがあると考えられます。一般的には馬を用いた事業は「体験乗馬」や「馬車」ではないでしょうか？このようなモデルは、単価×人数×馬の稼働日数で収入の上限が決まってしまう。大きな集客力のある団体は「見せる型」、馬や騎馬を見に来る人々に課金する仕組みを有しています。つまり、地域振興のためには乗馬させることなく、馬の放牧風景を見に来る人に課金できるような仕組みを構築するようなチャレンジになるはずです。

しかし、馬産業は農水省管轄の中央競馬会を起点とした強い資金獲得力を有しており、初めから「見せる型」であるにもかかわらず、多くの助成金事業については「乗せる型」に費やしていく構造になりがちです。これは、助成金事業自体で収益を獲得することが死活問題とはなっていない団体であるからであり、良い資金の出し手であっても、必ずしも地域振興とは目線があってこない可能性がある点には

留意が必要です。

5. 私権の対立

日本に野良馬はおらず、すべての馬には所有者がいます。二人以上の人間が出会えば、飼育方法や馬の評価について意見が合わないことや地理的な遠隔性もあり、個々の情報交換は活発になったとしても、「在来馬」全体としての意思決定は困難なままである可能性があります。

6. 馬格と使役量

馬を使役に用いる動きも盛んになってきていますが、嘗ての「馬力が有力な動力」であった時代の生産能力に到達しようとする傾向には注意が必要です。利活用でも触れたように、そのような需要は「改良品種」や「機械動力」や「化学農法」にとって代わられたので、単に追いかけるのはそもそも不利な取り組みと考えられます。また、そのような使役に用いる馬装（馬装：馬に装着する道具）も頑丈な構造となる傾向があり、それだけで馬に対する負荷が高くなります。そのため、大型な馬を扱う傾向にあり、大抵の人には参入障壁になるでしょう。広く門戸を開くには、生産能力は無視して「馬と一緒に作業を楽しんでいく」。その積み重ねの先に新たな工夫が生まれてくることを期待して、「小柄な馬」の身の丈にあった装備を模索しながら、一緒に遊び・学ぶような方法が適しているのではないのでしょうか？

令和3年度筑波大学山岳科学センターシンポジウム

草原のつながり ～人と自然が織りなす歴史遺産～ 開催報告

（須賀 文：長野県環境保全研究所・田中健太：筑波大学山岳科学センター）

全国草原ネットワークは各地の充実した取り組みをつないでいます。しかし、ネットワークの外で、草原再生の意義や方法が広く社会で共有される状況にはまだ至っていないかもしれません。自然環境の保全では、国立公園や外来種の駆除活動なら多くの人がイメージしやすいと思います。しかし草原再生にはそういうシンプルなイメージがまだありません。草原は保護だけでなく、火入れ・草刈り・放牧などの手入れが必要です。利用も考えなければなりません。その利用も、時代によってさまざまに変わってきました。草原は、萱のような歴史的・文化的な資源を生む場であり、スキーなどの観光のように比較

的新しい利用の場でもあります。草原の水源涵養機能や生物多様性も近年注目を集めており、新しい研究成果が生まれています。

このように草原と人とのかわりにはさまざまな側面があります。このことが草原再生を単純なイメージではとらえにくくしているのかもしれませんが。しかし一方では、そうした多様なつながりを横にむすぶことで新しいつながりを生むことができます。この点に注目してシンポジウムを企画、開催しました。長野県上田市内の会場での開催を計画しましたが、新型コロナウイルス感染症の拡大状況を踏まえてオンライン開催に切り替え、筑波大学菅平実験所

に講演者が集まって配信しました。概要は以下のとおりです。

【日時】 3月27日(日) 13:00~17:30

【プログラム】

挨拶

「草原の日本文化」

須賀 丈 (長野県環境保全研究所)

「阿蘇草原の水利用：草原の維持は水源涵養に役立つのか？」

宮沢 良行 (九州大学)

「茅場草原の利用と茅葺き文化の継承」

松澤 朋典 (小谷屋根)

「スキー場を核としたグリーンシーズンツーリズムの展開」

呉羽 正昭 (筑波大学山岳科学センター)

「地域再生が叫ばれる時代に、草原再生を進める意味と方法」

白川 勝信 (芸北 高原の自然館)

「草原とともに消えゆく莫大で未知な遺伝資源」

田中 健太 (筑波大学山岳科学センター)

質疑応答

話題の多彩さに応じて、質問も多岐にわたりました。話題が交差する中で、草原の歴史的利用や価値と科学的データとのかかわり、茅葺き文化や学校の環境学習と地域コミュニティ・持続可能な観光とのつながりなど興味深い論点が浮かびあがってきました。これらの点についてあらためて別の機会に整理してご紹介したいと思います。396名の参加申込みがあり、285名が実際に接続・参加しました。今後さらに新しいつながりに向けて連携を深めたいと考えています。

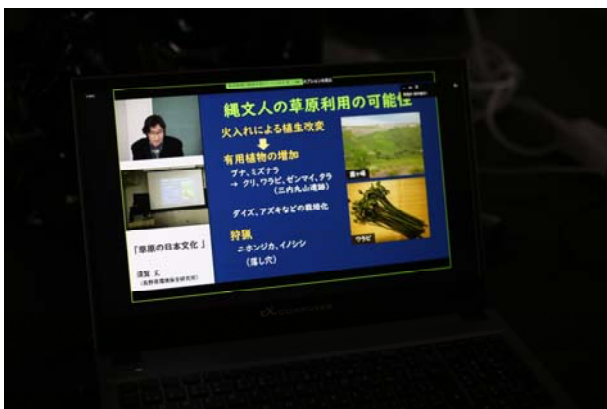
【主催】 筑波大学山岳科学センター

【共催】 長野県環境保全研究所

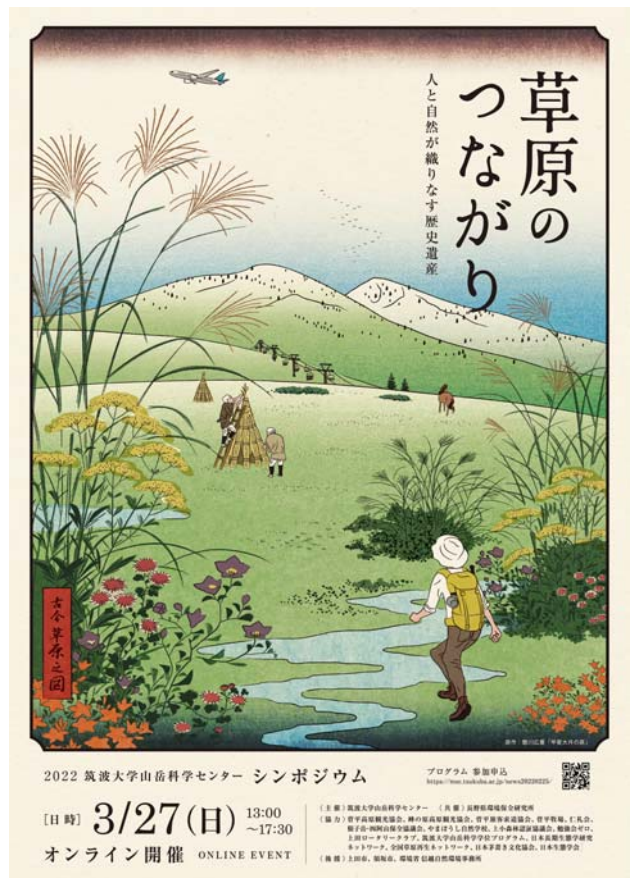
【協力】 全国草原再生ネットワーク、日本茅葺き文化協会、日本生態学会ほか



田中の講演 (筑波大学山岳科学センター提供)



オンライン配信画面 (筑波大学山岳科学センター提供)



シンポジウムのちらし (筑波大学山岳科学センター提供)

草原をめぐる動き (2022年1月～2022年4月)

- 4/1 扇山火まつり (場所: 大分県別府市扇山、連絡先: 別府八湯まつり実行委員会)
- 4/9 雲月山の山焼き (場所: 広島県北広島町 連絡先: 西中国山地自然史研究会)
- 4/10 深入山の山焼き (広島県安芸太田町、連絡先: 安芸太田町産業観光課)
- 4/12 ボランティア「野焼き見学と草原保全セミナー」(場所: 熊本県阿蘇市 阿蘇の草原・阿蘇草原保全活動センター、連絡先: 公益財団法人阿蘇グリーンストック)
- 4/16 寒風山山焼き (場所: 秋田県男鹿市、連絡先: 男鹿市観光課)
- 4/16 月例観察会(場所: 兵庫県神戸市 東お多福山、連絡先: 東お多福山草原保全・再生研究会)
- 4/16 千町原保全活動(場所: 広島県山県郡北広島町 千町原、連絡先: 西中国山地自然史研究会)
- 4/23 山焼き後の雲月山植物観察会(場所: 広島県北広島町 連絡先: 西中国山地自然史研究会)
- 4/29-30 上ノ原茅場の野焼き(場所: 群馬県みなかみ町、連絡先: 森林塾青水)
- 5/7 自然観察会「サクラソウと蒜山の春」(場所: 岡山県真庭市、連絡先: 津黒いきものふれあいの里)
- 5月上旬 小清水原生花園 火入れ(場所: 北海道斜里郡小清水町、連絡先: 小清水町役場)
- 5/15 乙女高原の遊歩道づくり(場所: 山梨県山梨市 牧丘町乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 5/18 春のモニタリング(場所: 兵庫県神戸市 東お多福山、連絡先: 東お多福山草原保全・再生研究会)
- 5/15, 5/22 乙女高原のスミレ観察会(場所: 山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 5/21 オオハンゴンソウの駆除活動(場所: 広島県山県郡北広島町、連絡先: 西中国山地自然史研究会)
- 5/21 第4回アジア・太平洋水サミット 関連イベント「熊本の水と、阿蘇草原って、どんな関係!?!」(場所: 熊本県熊本市 熊本市民会館、連絡先: 阿蘇草原再生協議会事務局 環境省九州地方環境事務所)
- 5/22 タチスミレを観察しよう(場所: 茨城県坂東市、連絡先: ミュージアムパーク茨城県自然博物館)
- 5/26 月例観察会(場所: 兵庫県神戸市 東お多福山、連絡先: 東お多福山草原保全・再生研究会)
- 6/4 乙女高原自然観察交流会 黄色いスミレハイキング(場所: 山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 6/18 月例観察会(場所: 兵庫県神戸市 東お多福山、連絡先: 東お多福山草原保全・再生研究会)
- 6/26 マルハナバチ調べ隊(場所: 山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 7/13 夏のササ刈り(場所: 兵庫県神戸市 東お多福山、連絡先: 東お多福山草原保全・再生研究会)
- 7月中旬 防火帯刈り(場所: 群馬県みなかみ町、連絡先: 森林塾青水)

※予定が変更になる場合があります。上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

全国草原再生ネットワーク ニュースレター vol. 50 2022年4月号

一般社団法人全国草原再生ネットワーク事務局
〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 378-14
大田市ゲストハウス雪見院内 Tel. 0854-82-2727 Fax. 0854-86-8899

【編集後記】「未来に残したい草原の里 100 選」の選定が行われ、第一弾として全国で 34 箇所の草原の里が選ばれました。秋には表彰式やシンポジウムも予定されています。また、第二弾の募集も予定されていますので、みなさまのご協力をお願いいたします。